
日和一四天王編一 ~ 白竜伝説 ~

白蜜庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日和ー四天王編ー ー白竜伝説ー

【Nコード】

N8877Y

【作者名】

白蜜庵

【あらすじ】

三千年に一度封印の力が弱まるとき、琥珀の龍が天を舞い、人々に災いをもたらすという。

伝説の始まり

黒い邪気が渦巻く空間

そこには2人の青年がいた。

一人は着物のような服に頭には角が生え肌の色は少し濃い。

もう一人は黒髪にすきとおる白い肌。

何の混じりけも無い深く淡い赤い目をしていて、紫色の着物を着ている

黒髪の方がつぶやく

「鬼男くんいよいよ今年だね」

そして「鬼男」と呼ばれたほうは

真剣なまなざしで言う。

「そうですね・・・」

だが黒髪の方はにこやかに答える

「さてと！そろそろ下界にいっつか

そう言いつとぶわりとジャンプする

「はい」

そういったとたん

2人はその空間から消えた。

夕焼けに染まる山道

とある山道

曇り空なので今がどれくらいの時刻なのかはわからないが、昏過ぎくらいだろう。

この山道には僕と芭蕉さん以外に歩いているものはおらず、さっきから誰ともすれ違っていない。

急斜面だから歩きにくいと言つのもあるが・・・

周りには木がうつそうとしげっていて、すぐ側に看板のようなものがささっている。

それもずいぶん古いものらしく、表面が削れていてなんと書いてあるのかまったく言っていないほどわからない。

おそらく村の表札かなにかだろう。

「ねえ曾良くん・・・もうそろそろ休憩しようよ」

宿を出てからまだ五キロしか歩いていないというのに

もう弱音を吐いている

僕は芭蕉さんの弟子だが、どちらが師匠かわからない。

かの有名な松尾芭蕉だというのに、
ろくな句を読まない。

なぜだろう・・・

昔は、いや昔のことなので良く覚えてはいないが、

僕が弟子入りしたころは

一生この人について行こうと思っていたのに。

「さっき茶屋に寄ったばかりじゃないですか」

「だって足がもうパンラハギだよ」

そう言う芭蕉さんはふらふらと今にも倒れそうな状態で半泣き状態だ

足取りも遅く、これ以上進んだら本当に倒れてしまいかもしれない。

「まったく・・・困った弱ジジイだ・・・おや？」

目線の少し先に小さな村がある

村と言ってもとても小さく、民家が集まっているような大きさ。

こんな所に人が住んでいるのだろうか？

「ここで少し休んで行こうよ！」

いつもこうやって休んではかりいる気がします・・・
僕も少し疲れていたので同意することにした。

「まったく・・・しかたないですね」

「ひゃっほーい！！！」

「あんまりはしゃぐと断罪しますよ」

「はしゃいだだけで!?!」

そうして僕たちは小さな村へと

足を踏み入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8877y/>

日和—四天王編— ~ 白竜伝説 ~

2011年11月26日18時51分発行